

第32回

北勢線の魅力を探る

# 六把野井水と自噴井

第12回六把野井水のハイライトにこの地域に多くある自噴井をプラスして歩きます。

六把野頭首工



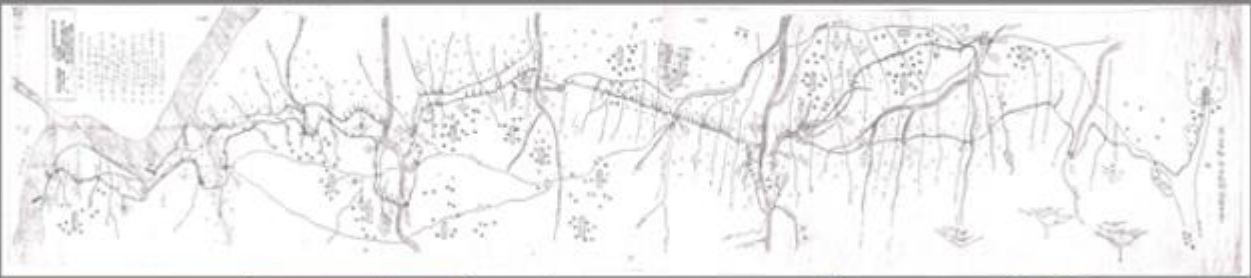
上笠田城跡



ねじり橋



吉備川掛樋



麻生田自噴井



北金井自噴井



開催日： 2022年 4月23日(土)

集 合： 9:20 北勢線 麻生田駅

コース：約8K 麻生田駅—六把野頭首工—麻生田自噴井 2 個—麻生神社—上笠田城跡—  
下笠田八幡神社—めがね橋・ねじり橋—吉備川掛樋—北金井自噴井 2 個—  
了雲寺・解散(12:35 頃)(—楚原駅または大泉駅)

北勢線の魅力を探る会

開催日：2022年 4月23日(土)  
参加人数：28人  
協力：麻生田自治会、下笠田自治会、了雲寺

## 実施までの経緯、麻生田駅 ～ 六把野井水・頭首工 ～ 麻生田の自噴井

土井 忠之

2022年4月23日（土曜日）に実施された第32回北勢線の魅力を探る「六把野井水と自噴井」は、2年越しの企画で難産の末のイベントであった。

2年前（2020年）の1月5日（日曜日）に今回と同様のコースで北勢線の魅力を探る会のメンバー8人で下見を行い、本番に備えてコース地図と各見学ポイントの解説文を作成・印刷し、4月19日（日曜日）の本番ウォークに備えた。2019年度のウォークからは参加人数を50名に限定し、少数精鋭によるウィークを万全に準備したのだった。

しかし、2020年2月から新型コロナウイルスの国内でも感染が広がりを見せ始め（中国・ウーハン（武漢）から始まった新型コロナはクルーズ船の集団発症などいよいよ日本にも上陸してきた）、2月下旬からは不要不急の旅行や多人数でのイベント参加が自粛されるようになり、4月実施予定の本番ウォークも秋へと延期されることになった。さらに秋の企画も延期となり、1年後の2021年春にスライドされたが、新型コロナの第2波・第3派の襲来によりそれも不可能となっていった（2021年夏には東京オリンピックがほとんど無観客での実施とはなったが・・・）。

そんな中で、1年後の2021年5月18日（火曜日）に探る会のメンバー4人で本番のコースをほぼ時間通りに歩いてビデオ動画で撮影し、後日編集したものをYouTubeで動画配信し、申し込みのあった参加者に見てもらった。また、コースの中で解説予定であった「員弁川中流域の自噴井」については土井が、「了雲寺の歴史」については了雲寺の入野住職がそれぞれZoomなどで撮影し、それぞれの解説（15～20分に編集）をこれも参加者にYouTubeで動画配信することになった。

ともあれ、以上のような経緯を経て、本年4月23日に2年越しでの本番ウォークにやっとき着けたのだった（残念ながら2年前の申込者からは当日の参加者が減少したが、、、）。

2022年4月23日（土曜日）、第32回北勢線の魅力を探る「六把野井水と自噴井」のイベントは麻生田駅から始まった。当日の天候はやや曇り空（その後晴れる）、暑くもなく快適なウォーキング日和となった。麻生田駅でスタッフ4人が受付の準備を始めると、ケーブルテレビ（CTY-TV）のカメラマン



麻生田駅

が本日のコース全般を取材し、後日テレビ放映するとの挨拶があった。

9:17 着の北勢線の下り（阿下喜行き）で本日の参加者や残りのスタッフも到着し、駅前は一気に賑やかとなった。全員検温の後、参加費（保険代を含む）の徴収、資料としてのパンフレット（コースのタイムスケジュール）とコース地図（見どころの解説）の配布を順次行い、参加者全員が駅前広場に集まった。この方々は2年前に申し込んだ方（この2年間で限定の50名から随分少なくなりましたが）に本年若干の追加者が加わり、28名となった。

近藤代表による挨拶では久しぶりのイベント開催の意義やコース上での諸注意などが話され、久しぶりの参加者の方々の顔が明るくなったように感じた。

洪積台地上（標高97m）の麻生田駅をスタートし、北勢線の踏切を渡り段丘崖を下って麻生田集落の北側（麻生田公園に簡易トイレあり）から北に歩き、六把野井水頭首工に向かった。

員弁川を横断する六把野井水頭首工に到着し、頭首工の建設に関わる解説を行った。江戸時代に建設された当初、六把野井水の取水は約700m下流の麻生神社近くの員弁川から行われていたが、員弁川の河床の浸食によって取水が困難となり、682m上流に新たに頭首工を建設することになった。三重県の事業で1957（昭和32）年に着工、1966（昭和41）年に竣工し、工費は1億6000万円かかったと

いうことで、管理小屋の横に当時の田中覚知事が揮毫した記念碑が建っている。員弁川を横断する形でコンクリート堰堤で川を止め（一部魚道あり）、左岸から六把野井水に取水し、ここから六把野井水が始まる。以上のようなことを、堰堤上で説明した。



六把野井水頭首工



記念碑



コンクリート堰堤



取水口

その後、来た道をやや戻り、麻生田公園から麻生田の集落の中に入った。植垣をアーチ状にしたお宅や春の花が賑やかな畑などを眺めてしばらく集落内を南下すると、麻生田第4組の自噴井の大きな濾過槽のタワーが見えてきた。

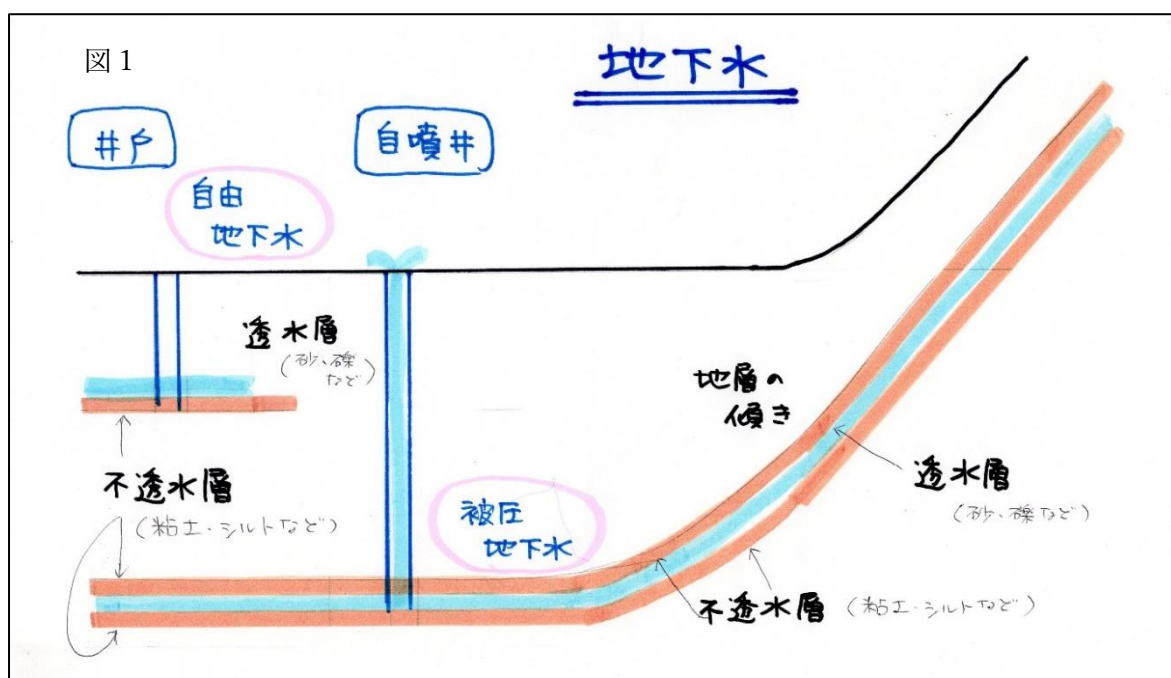


麻生田の集落の中



第4組の自噴井

麻生田第4組の自噴井の横で、この時近くの畑を耕運機で起こしていた方の音を止めていただき、図1のパネルを使って自噴井とその構造について説明した。



自噴井（掘り抜き井戸）とは、一般的な家庭の井戸とは異なり、特殊な地質構造から地下水が自動的に噴き出る不思議な井戸で、1年365日24時間絶え間なく地表に自噴して（湧き続けて）いる井戸である。水温は一年中一定で、夏は冷たく（スイカや飲み物を冷やすには最適）、冬は温かく（雪の降る日には湯気を出して）感じる。

一般的な井戸（浅井戸）は、不透水路（粘土やシルトなど水を通さない地層）の上の透水路（砂や礫など水を通す地層）に溜まった地下水（自由地下水）を汲み上げるもので、地下水は数m下の地下にとどまっているため、ポンプやモーター（古くは釣瓶）などを使って地表まで汲み上げることになる。これに対して自噴井は、地下の深くの透水路（砂礫層）が水

を通さない不透水層（粘土層）にサンドイッチ状に挟まれ、しかも、地層全体が傾いているため、不透水層によって挟まれた地下水は上部（地表よりも高い位置にあれば）からの圧力を受けて被圧地下水となり、井戸を掘ればその圧力によって地表上に自噴することになる。このような特殊な掘り抜き井戸（深井戸）が自噴井である。

さて、員弁川中流域の 16 の集落には 100 を越える自噴井が存在していて、そのほとんどが個人所有のものである。しかし、麻生田集落の自噴井は隣同士の組（自治会内の隣近所の最小単位、班というところもあり）が共同で大規模な自噴井を掘り、大型の水槽（濾過槽）から各家庭に給水する大規模なものが 5 つあり、他に個人宅（酒屋など）のものが 3 軒存在する。

#### 第 4 組の自噴井



今回まず見てもらった第 4 組の自噴井は、組内の 12 軒共同で昭和 40 年代に掘削したもので、地下 100 間（約 200m）から水温 17.7℃の地下水が自噴し、4m を越える 2 つの大型水槽（濾過槽）から各家庭に給水し、水道が各家庭に引かれるまでは飲用にも使われ、現在でも洗濯や風呂の水など生活用水として使われている。余った水は水槽下で 2 段に落として洗い場となっているので、参加者にはそれぞれ地下水に触れて水の冷たさを実感してもらった。



麻生田地区の第 4 組の自噴井から 200m ほど南下すると、麻生神社の入口に第 5 組の自噴井がある。ここでも簡単にこの自噴井の概要を説明した。第 5 組の自噴井は、組内の 8 軒で昭和 36 年～41 年に掘削し、地下 90 間（約 180m）から水温 19.5℃の地下水が地上 4m に

ある鉄骨の高層のタンクに噴き上げ、ここから現在でも飲用や生活用水用に各家庭に給水され、余剰水がタンク下の水槽に流されていた。以上の説明の後、参加者の方から「なぜ自噴するのか？」という質問を受けたが、自噴井に関しては北金井の 4 つ目の自噴井を見た後でまとめて解説することを伝えて、すぐ横の麻生神社に向かった。



#### 第 5 組の自噴井

あさお  
麻生神社

山下 博子



麻生神社拝殿

麻生田自噴井 2 カ所の説明を聞いて、ここから少し進んで行くと麻生神社の鳥居が右手に見えてきました。この神社は員弁川中流左岸の沖積平野上に位置します。古来から村内に豪族が埋葬された麻績塚（おみづか）」と呼ばれる古墳があり、被葬者は「麻績連（おみのむらじ）」という伝承があります。少なくとも奈良時代には既に集落が形成されていたことが窺われます。

この麻生神社の起源は古く『三重県神社誌』によれば「神鳳抄」に麻生田御厨（みくり）十五丁三石、「外宮神領目録」に麻生田御厨壺石五斗とあり、伊勢神宮へ神饌を調進する御厨の地で、古くから天照大神を奉祀する神明宮を中心に多くの産土神を祀る社がありました。ただ、勧請年代は不詳とあります。『北勢町史』によると、天明 4 年(1784)のご領内控記には、「神社八ヶ所」とあり、明治 5 年に村社に列せられたと記載されています。明治 41 年(1908)5 月 25 日、国の神社合祀令により、次の諸社を合祀して「麻生神社」に改称されました。神明宮に地内の山神社 2 社、田中神社(牛頭天皇社とも、須佐之男命)、八幡社(火産靈神)、天白社(天白羽神)、八神社(大山祇神)、熊野社(伊邪那美命、宇迦之御魂命、建御名方神)、菅原神社です。

「麻績連」は当神社に合祀された天白社の祭神「天白羽神（あめのしらはのかみ）」の末裔で、この地は麻の栽培・紡織が盛んで朝廷に献上したことから麻の産地として有名になり麻生田と呼ばれ、麻生神社の名称もこうしたところから関係づけられるようです。

六把野井水の水源近くに鎮座するため、その恩恵を受ける 13ヶ村の村人から守り神として篤い信仰を集めたといわれています。干魃の時には雨乞いの神事が行われ、水の安定を祈ったのでしょう。境内には「水下拾三ヶ村 御神燈 嘉永西(1840)」と刻まれた石柱が建てられています。また、神社の幟一對は古くなると六把野井水組合から奉納される慣習があるそうです。



水下拾三ヶ村と刻印の石柱

現在の本殿造営(神明造)は昭和 16 年(1941)、拝殿は平成 6 年(1994)に新築されました。

次の目的地の山田川井堰へ。鈴鹿の山々を眺めながら、六把野井水の水路と並行した道を歩きます。時折どこからともなく鶯の鳴き声に癒され、足取りは軽く歩めました。

## 六把野井水（開口部から井水に沿って） ～ 山田川（逆サイフォン）

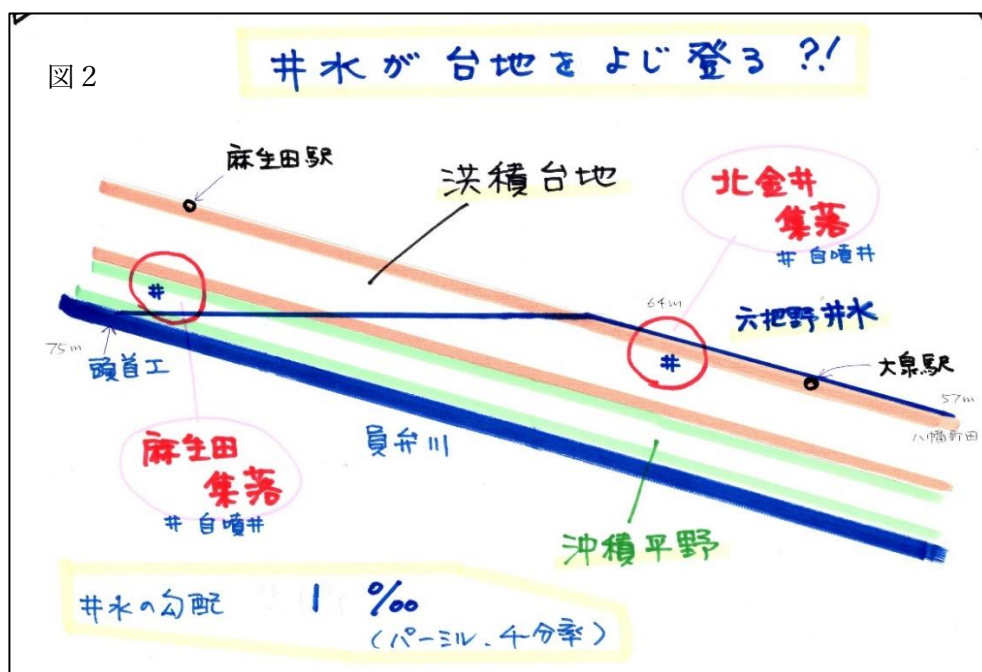
土井 忠之

六把野井水・頭首工から取水された員弁川の水は、しばらく地下のトンネルを流れた後、麻生神社の西側で開口し、勢いよく流れ出す。すぐ横には員弁川が流れ、江戸時代の取水はこの辺りで行われていたとのことである。



この開口部で図2のパネルを使って六把野井水の概要について説明した。

六把野井水は、江戸時代の初期、1601（慶長6）年（桑名城主が初代の本多忠勝の時代）から1635（寛永12）年（第5代藩主・松平定綱の時代）まで、35年の歳月を経て完成した灌漑用の農業用水で、上笠田村大庄屋二井家が計画し、麻生田・萬笑院の中興の祖・文華和尚の尽力によって作られた。その長さは3里29間（約12km）、幅は2～5mで員弁川の水を流し、水下13ヶ村の田畑460町歩（約4600ha）を灌漑するものであった。なお、六把野井水の勾配は1‰（パーミル、千分率）で、これは1km（1000m）で1m（1mでは何と1mm）下るという極めて精緻な設計・施行であった（三重県歴史資料調査員の渡部勇さんのまとめより）。



員弁川の流域には沖積平野と洪積台地は並行して存在し、標高の高い方の洪積台地が河岸段丘を形成し、両者の間には段丘崖がある。沖積平野とは、現在の地質時代である新生代第四期完新世（1万年前～現在まで、沖積世ともいった）に員弁川の氾濫によってできた平野で、員弁川とほぼ同じ高さである。これに対して洪積台地は、一つ前の第四紀更新世（160

万年～1万年前、洪積世ともいう)の時代に員弁川の氾濫によって形成された地形で、更新世の時代は今よりも相対的に海面が高かった関係で、現在の沖積平野よりも10mほど高い台地となっている。

六把野井水は標高75mの員弁川から取水し、麻生田地区では洪積台地(麻生田駅は洪積台地上にある)と沖積平野(麻生神社は沖積平野面にある)の境界を作る段丘崖に沿って流れていくが、上笠田地区では洪積台地を切り割って流れ、やがて御園地区(いなべ総合学園高校の北側)では段丘崖の上部を横切るように流れ、そしてついに北金井地区では洪積台地の上に「よじ登った」ように流れていく。図2のパネルで示すとおり、員弁川は上流より下流に向かって緩やかに流れ下っていく。それに伴って、員弁川兩岸の沖積平野と洪積台地も緩やかに標高を下げていく。その中でほとんど直線(1‰の微小の下り)に近い六把野井水は、流れて行く先では洪積台地に「よじ登っていく」ことになるのだ。

このようにして、六把野井水が完成した後には洪積台地上にも農業用水が届けられ、新田の開発が進行した。八幡・六把野などの親村から八幡新田・六把野新田・大仲新田などの新田集落が誕生していったものと思われる。

江戸時代の初期には、関東では多摩川の水を上流部(羽村)で取水し武蔵野台地に給水する玉川上水が開削されたが、江戸(東京)西郊の武蔵野台地上に多くの新田集落が誕生したことと期を一にする。六把野井水はそんな歴史的な井水(農業用水)なのだ。

以上のような解説を行った後、六把野井水に沿って歩き始めた。麻生田集落の西側を井水が流れ、洗い場用として井水に階段を設けた所もあった。藤原岳を背中に井水に沿って歩いて行くと、麻生田東端の萬笑院の階段下からは段丘崖の下に沿った流れとなる。右手には員弁川が流れて沖積平野が広がり、遥かに竜ヶ岳・釈迦ヶ岳・御在所岳・入道ヶ岳などの鈴鹿山脈の山並みが遠望できる。

右下の田圃には六把野井水からの給水が始まるが、一部には麦畑にもなっていて青い麦の穂が風にそよぐ。井水に沿った道は左側の段丘崖の木陰となり、

気持ちのいいウォーキングコースだ。北勢線は段丘崖の森の中を麻生田駅から下ってくる。



井水の勢いのよい流れに引っ張られるようにしばらく歩いて行くと、山田川の手前で北勢線の橋梁にぶつかり、北へと向きが変わる。さらに歩いて、員弁街道（濃州道と呼ぶ旧道）と山田川が交わる橋の北側に到着した。ちょうどここが六把野井水が山田川とぶつかる地点である。折しも北勢線の黄色い電車（下りの阿下喜行き）が山田川橋梁をガタンゴトンと渡っていった。



山田川橋梁を渡る北勢線

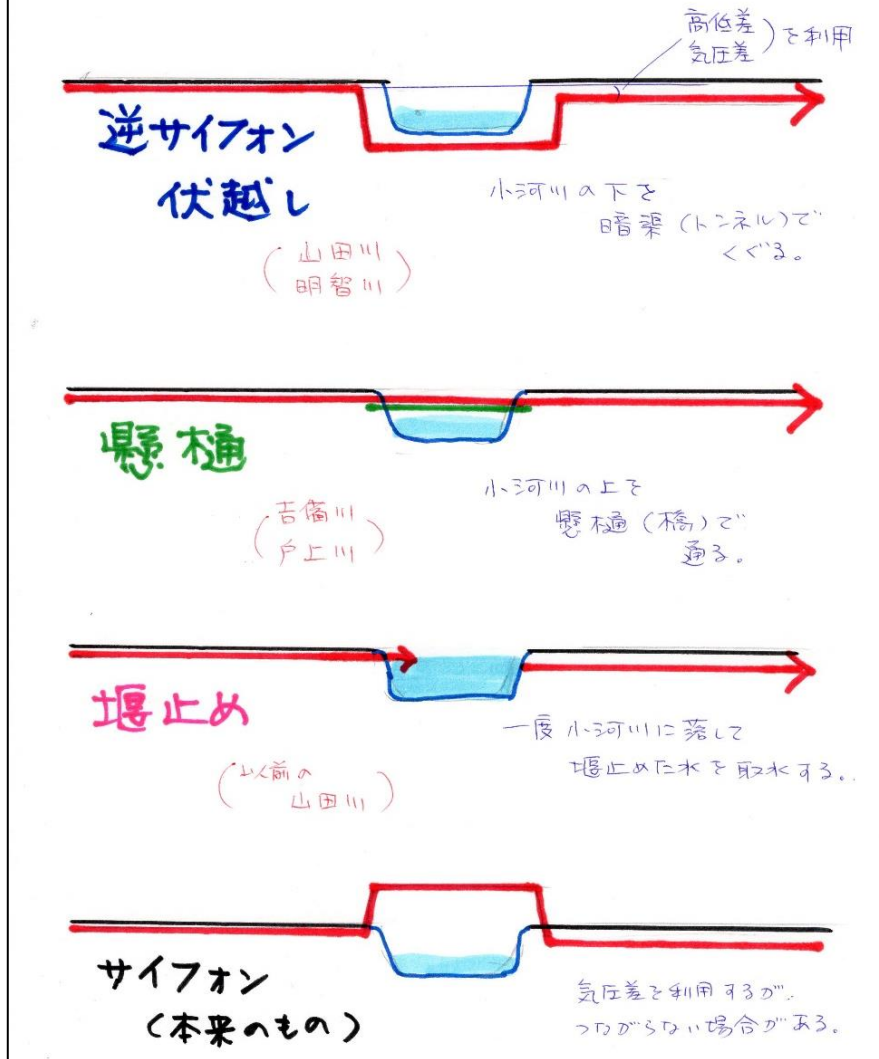
六把野井水と山田川の交差点で、井水が小河川を越える（渡る）方法について図3のパネルを使って解説した。員弁川の左岸には養老山地側からいくつかの小河川が流れ出ていて、それぞれの小河川を六把野井水が横断することになる。井水が小河川にぶつかり何もしないとせっかくの水が小河川に流れ落ちて井水が終わってしまうので、色々な方法で小河川を越える工夫を行って流れを継続することが必要となる。

山田川では「逆サイフォン」という方法で井水が山田川の下を潜る。本来のサイフォンは図3のパネルの一番下のように小河川の上を越えていくものだが、「逆サイフォン」は図3の一番上のようにサイフォンとは逆で、一端下に下降して小河川の下をトンネルで抜け、対岸で再度上昇させて流れを繋ぐやり方で、古くは「伏越し（ふせこし）」と呼ばれた。対岸の方を少し低くしておけば、水が自動的にくぐり抜けて流れが連続して繋がることになる。

江戸時代からの古い六把野井水はこの地点で一端山田川に落とし込み、少し下流に堰を作って水位を上げ（「堰揚げ」といい、図3の上から3番目の方法）、対岸から再度取水して下流へと繋いでいたようだ。しかし、頭首工の建設に伴う三重県による改修工事の時に現在のような逆サイフォンの方法が採用された。

図3

# 井水の小河川の越え方



解説地点では六把野井水がすごい勢いで地下のトンネルに流れ込んでいた。山田川の河原には何もないが、この川底をトンネルで抜け、対岸で吹き出すのだ。

山田川を渡った六把野井水は今度は上笠田集落の下の段丘崖に沿って流れ、中世の上笠田城跡（戦国時代に織田信長の北伊勢攻勢によって滅ぼされた）では洪積台地を切り割りで通過し、さらに下流の明智川ではやはり逆サイフォンで潜って（ここでは昔からこの方法で通過して）、ねじり橋に至る。



山田川

## めがね橋、ねじり橋

西羽 晃

私は昨年春から左膝が痛み、短距離なら良いが、長距離を歩くことが困難になった。そのため、今回私は伴走車に乗せてもらったので、めがね橋が見えるところで車から降りしてもらった。電車の通過時刻を気にしながら、一行を待つ。めがね橋付近は田圃の中なので、田圃に水が張ってあると、水面に電車が映って、素晴らしいビューポイントになるのだが、まだ時期が少し早いようだ。

一行は到着したが、電車の通過時刻が迫っているが、一部の人は急いでめがね橋に近づいて行って、上り電車を写真に収めた。次にねじり橋に一行が到着すると、間もなく下り電車が来た。この車両は全面に「ヴィアティン三重」の宣伝をラッピングしてある特別仕様である。たまたまに貴重な写真を撮ることができた。尤も同行取材のケーブルテレビのカメラマンは渋い顔をしていた。テレビ画面にコマーシャルが入ることは好ましくないようだ。

今のねじり橋付近は樹木が切り払われ、雑草も無くて歩きやすく、すっかり明るくなっている。私が最初に見たときは薄暗かった。その時は集山一廣さん（2021年に他界された）と一緒に歩いていて見つけて、その曲線美にびっくりした。私は「ねじり橋」と名付けたが、その後は「ねじり橋」の名は定着したようだ。

めがね橋とねじり橋は大正5（1916）年に完成したが、その当時は第一次世界大戦のため、鋼材不足であり、コンクリートブロックで造られた。ねじり橋は「ねじった」形なので、個々のブロックは形状が違うので、違った型枠で造られたようだ。これを考案したのは誰か不詳であるが、私は郡新一郎かと推測している。この橋を含めて路線の工事を請け負った郡竹治郎は久米村坂井（現在の桑名市坂井）の土木業者である。彼の息子の郡新一郎は大正5年に東京帝国大学工科大学土木科を卒業した土木技術者で、のちに南満州鉄道の技師となった人物であり、新一郎が大学在学中にこの橋が設計されているので、新一郎が関与したのではないだろうか。



めがね橋でシャッターチャンスを待つ人々



ねじり橋とヴィアティン電車



下から見上げたねじり橋

## ねじり橋 ～ 御園の段丘崖 ～ 吉備川（懸樋） ～ 北金井の自噴井

土井 忠之

ねじり橋での解説を聞いた後、再度六把野井水に沿ってウォーキングを進めた。ねじり橋の下で40度で交差した六把野井水は、洪積台地上にある下笠田や御園の集落（楚原駅も台地上にある）の南側の段丘崖の中程を東に流れていく。段丘崖の下を歩いて行くといなべ総合学園高校の大きな校舎や体育館が見え、その間の田圃に今まさに六把野井水の水が注がれ始めていた。左側の井水は等高線に沿って段丘崖をジワジワと「よじ登って」行く。

吉備川という小河川にぶつかるが、ここでは井水の方が吉備川よりもかなり高い所を通るので、「懸樋（かけひ）」で吉備川を渡っていく。「懸樋」とは、図3（P10）の2番目で示したように小河川の上を三面の箱状の樋（橋）で越えるもので、古くは木製の懸樋であったようだ。現在は青い鉄製の懸樋になっていて、井水（用水）と河川の立体交差だ。この先の戸田川でも、河川の方がかなり低いので同様の懸樋で越えていくことになる。

吉備川から北金井の集落へは井水に沿って直接歩きたいのだが、ちょうど新道の工事が始まっていて、南側のみずほのおかげ市場（トイレあり）に立ち寄り、少し迂回して段丘崖を上り北金井集落に入ることになった。



ねじり橋と六把野井水



吉備川懸樋



いなべ総合学園高校とみずほのおかげ市場

北金井の自噴井は5つあり、全て個人所有の掘り抜き井戸である。

その中でまず最初に、H・Iさん宅の自噴井を訪れた。北金井集落の北西端に位置するお宅で、洪積台地まで「登ってきた」六把野井水のすぐ横に大きな池がある所である。この自噴井は昭和39年に掘削され、地下250mから水温15.8℃の地下水が自噴し、かつてはすぐ横の養殖池に流し込み、マス进行育てていたという。「赤ソブ」と呼ばれる鉄分の多い水で、試みに茶葉にこの自噴水を注ぐと鉄分と化学反応して「タンニン鉄」となり、緑のお茶の色が黒く変色した。この様子に参加者に見てもらった。北金井の自噴井は「赤ソブ」が多く、地名の「北金井」は金属（鉄分）の多い井戸というところから命名されたのではないかと推測される。ちなみに、大安町にも「南金井」という地名があり、やはり20を越える多くの自噴井が集中する地域でもある。



H・Iさん宅の自噴井



すぐ横の池



黒く変色したタンニン鉄

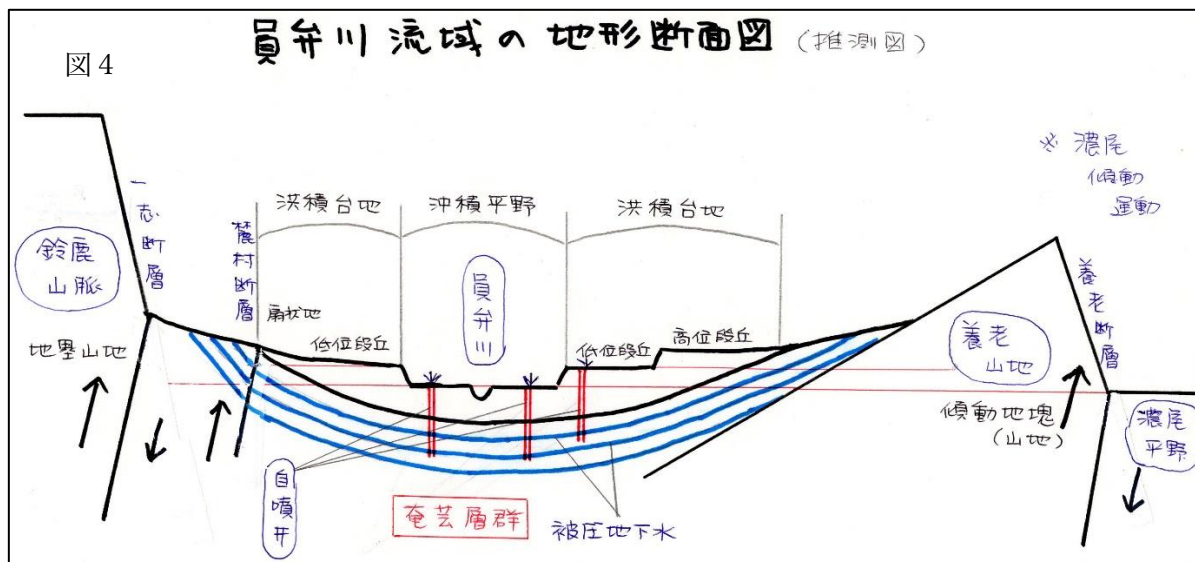
続いて、そこからしばらく歩いた所にあるH・Nさん宅の自噴井を見学した。この自噴井は昭和42年に掘削され、地下80間（約160m）から水温15.8℃の水が勢いよく噴き出していて、かつては飲用やすぐ横の養殖用（コイ）、養豚の畜舎の冷却用に使われたということだ。



H・Nさん宅の自噴井



北勢町麻生田（低い沖積平野）の組共同の2つの自噴井と員弁町北金井（相対的に高い洪積台地上）の個人所有の2つの自噴井を見てきたが、全体をまとめて「なぜ自噴井が噴き上がるのか」を最後に図4のパネルを使って解説した。



員弁川流域だけではなく、東海地方の西側（愛知県・岐阜県の濃尾平野から三重県北部の北勢地域まで）のかなり広い地域の地形と地質構造を全体的に眺めてみると、まず濃尾傾動運動（濃尾平野では東側の名古屋市側が隆起し、西側の木曾三川方面が沈降する地形運動）とそれに伴う傾動地塊（傾動山地）の養老山地の存在が自噴井に大きな影響を与えていると考えられる。断層山地には、地塁地塊と傾動地塊という2つのパターンがあり、傾動地塊（傾動山地）は一方（片側）だけが断層運動を行うもので、左右非対称の山地が形成される。養老山地の場合、東麓の濃尾平野側の養老町や南濃町・多度町などには急峻な断層崖が存在し、山地から流れる河川は山麓にいくつかの扇状地を作ったり、断層崖に滝を掛けたりするが、いなべ市側の北勢町（阿下喜・麻生田など）や員弁町（楚原・北金井など）・東員町（八幡新田・六把野新田など）では緩やかな傾斜の丘陵部や台地を形成する。

養老山地の形成が終わった新生代第三期鮮新世の地質時代（500万年～200万年前）には、三重県の北部に東海湖という大きな湖があり（東は愛知県西部から岐阜県南部、南は三重県中部まで広がっていた）、周辺の山地（養老山地や鈴鹿山脈を含む）からの堆積物が安芸層群を作っていた。安芸層群とは、それぞれの堆積年代によって砂礫や粘土が6つの地層に順次堆積したものである。この安芸層群が、員弁川の東部では傾動地塊の養老山地の傾きに連動して傾斜し、さらに員弁川の西部では鈴鹿山脈の2つの逆断層により、また、員弁川の南部では桑名丘陵や朝日丘陵の背斜構造の地形によって、員弁川流域の地下深くで盆地構造となって凹んでいるのではないかと考えられる。このように、安芸層群に滞留した地下水は3方向からの圧力によって被圧地下水となり（その中央部の地下水は被圧がかかりやすくなる）、麻生田のような沖積平野面でも、北金井のような標高の相対的に高い洪積台地上でも、井戸を掘り抜くと自噴井として噴出するのではないかと推論される。以上のような説明で、本日の自噴井の解説をまとめた。

解説の後、北金井の自噴井からすぐ近くのと雲寺（本日の最後の見学地）に向かった。

予定時間を遅れて、最後の目的地である当寺に着いた一行をご住職は外で立って待っていらっしやった。ご住職は快く本堂に招き入れて下さり、「休憩がてら、お疲れでしょうから寝てもらって構いません」と前置きをされつつ当寺の紹介を始めて下さった。平成 27 年(2015 年)頃発見されたという寺宝「了雲寺高僧連座像」を掲げて頂きながら、プロジェクターを使ってわかりやすく解説を始めて頂いた。ところが、数分ですぐに帰りの北勢線の乗車時刻が近づいてしまった為に、止むを得ず途中で終了となってしまった。以下、当日解説いただけなかった当寺の歴史を紹介する。



了雲寺



本堂で説明するご住職

当寺の開創は鎌倉時代に遡る。浄土真宗宗祖・親鸞聖人の高弟である専信房専海は、建長 8 年(1256 年)遠江国鶴見(現・静岡県浜松市)にて布教を始めた。その専海上人に当地の天台宗僧侶であり、後に当寺開基となる了善とその父である了意(又は了恵)(1258 年没)・親子が入信して浄土真宗に改宗した。その後了善は、文應元年(1260 年)三河国六名(現・愛知県岡崎市)に浄土真宗道場を創建した。

正安 2 年(1300 年)には美濃国海西郡成戸(現・岐阜県海津市海津町成戸)に浄土真宗寺院として当寺を創建したが了善はその年に亡くなる。その為か当寺寺号は 2 世了雲からとられた「了雲寺」を称するようになった。この創建時の当寺は、開基了善が師事した専海上人が浄土真宗の中でも現在の真宗高田派にあたる系統の高僧であったことから、現在の真宗高田派の系統の寺院だったと推測されている。その後 350 年間は成戸の地に在ったが、この間に真宗大谷派第 8 代門首である蓮如上人(1415-1499)の六字名号が寺宝として遺されていることから、当時の住職が蓮如上人の教化を受けて現宗派である真宗大谷派の元となる系統に転派したと考えられているがはっきりとした記録は残っていない。

慶安 3 年(1650 年)、元々成戸の地は木曾川と長良川が合流する地で水害が多い土地であったが、桑名の地へ避難を余儀なくされる程の大水害に遭った。避難後の桑名の地で 18 世休意が東本願寺 15 代常如上人より延宝 5 年(1677 年)に「法性法身仏」(像ではなく字で表

された御本尊)を授けられたことにより、了雲寺の再興を果たしたと考えられている。

19 世慶春の時に美濃国成戸村へ戻り、東本願寺 16 代一如上人から、現御本尊である阿弥陀如来像の他、七高僧絵像、聖徳太子絵像、親鸞聖人絵像を授けられて、再び成戸の地での再興を果たした。

その後も約 200 年ほど成戸の地に在ったが、明治になり 27 世最正の時に、政府による木曾三川分流工事によって立ち退きを余儀なくされ、移転しなければならなくなった。しかも明治 24 年(1891 年)の濃尾地震で、山門と本堂を残して全て倒壊するという大きな被害を受けた。そのような状況の中、現所在地である員弁町北金井の有力者であった日紫喜九右衛門氏と種村兵助氏を始めとする住民の方々の招きにより明治 29 年(1896 年)に移転することが可能となった。以降、現住職 30 世・入野宣親氏に至る今日まで、少しずつ発展を続けながら北金井地区の寺院として親しまれている。

＝伽藍＝

<本堂> 明治 29 年(1896 年)に着工、明治 33 年(1900 年)に竣工。昭和 59 年(1984 年)に屋根瓦葺き替え工事。平成 27 年(2015 年)に改修。

<鐘楼> 明治 31 年(1898 年)に新築、平成 24 年(2012 年)に再建。

<書院> 昭和 50 年(1975 年)に新築。

<庫裏> 昭和 55 年(1980 年)に再建。

<墓所> 本堂向かって左に所在する。中央に歴代住職の墓である「当寺累代納骨碑」が昭和 4 年(1929 年)10 月に建立されている。裏面に銘文がある。その後ろには、明治政府の成戸から立ち退き要求で当寺と共に三重県への移転を余儀なくされた檀家の方や、住職の母方の親類の方の墓がある。共に当寺に多大な貢献をして頂いたということであった。さらに右奥には令和 3 年(2021 年)に完成した「了雲寺合同納骨墓」がある。



＝寺宝・什物＝

<本尊・木造阿弥陀如来立像> 仏師・宗重作。17 世紀末から 18 世紀初の制作と推測される。19 世慶春の時に東本願寺 16 代一如上人から授与。

<親鸞聖人絵像> 19 世慶春の時に東本願寺 16 代一如上人から授与。本堂の内陣の右脇壇（中央奥の間、本尊に向かって右側）に奉懸される。長い年月



本尊・木造阿弥陀如来立像

親鸞聖人絵像



により顔が消えているように見える。

＜蓮如上人絵像＞本堂の内陣の左脇壇（中央奥の間、本尊に向かって左側）に奉懸される。

＜聖徳太子絵像／七高僧絵像＞両像共に 19 世慶春の時に東本願寺 16 代一如上人から授与。本堂左余間（左奥の間）に奉懸される。

＜了雲寺高僧連座像＞平成 27 年(2015 年)頃、本堂内で発見される。それまで明治の当寺移転時に存在は記録されていたが行方がわかっていなかった。通常非公開だが、複製品が本堂の内陣の左脇壇（中央奥の間、本尊に向かって左側）前に奉懸される。愛知県三河地方には似ている像が比較のみられるが、北勢地域では珍しいとのこと。南北朝時代作成と推測され、当寺の歴史のみならず、浄土真宗の布教の歴史を知る上で大変貴重な史料でもある。明治 23 年(1890 年)4 月の本山からの鑑定書がある。

＜方便法身尊像＞通常非公開。延宝 5 年(1677 年)、当寺が桑名に在る頃、18 世休意が東本願寺 15 代常如上人より授与。大水害で失われたと思われるそれまでの御本尊の代わりとして授与されたと考えられている。余程急ぎで授与して頂いたのか像や絵ではなく文字のみで表されている。

＜六字名号(慧灯大師真蹟)＞通常非公開。蓮如上人が直筆で書かれた「南無阿弥陀仏」。明治 23 年(1890 年)4 月の本山からの鑑定書がある。

＜方便法身尊像／親鸞聖人伝絵／六字名号＞この三点は近隣の石仏地区にかつてあった「御講部屋」に奉懸されていたが、新しく石仏公民館に建て替えられたため、以降は当寺で預かることとなった。本堂左余間(左奥の間)に奉懸される。六字名号は東本願寺 22 代現如上人から授与されたものである。



聖徳太子絵像



七高僧絵像



了雲寺高僧連座像



六字名号（蓮如上人筆）

<本堂扁額>右横書きで「了雲寺」と寺号が掲げられている。種村学氏の書による。氏は地域の木工芸家で「いなべまちかど博物館・おきもの工芸館」の館長をされていた。

<本堂内陣扁額>縦書きで「光明山」と山号が掲げられている。当地域出身の書家、種村山童[さんど] (本名：司[まもる])氏の書による。氏は日展の審査員も務められた高名な書家であった。

<喚鐘>本堂向かって右側面に掛けられる。昭和23年1月28日、日紫喜長一郎、八三一氏らにより奉納。これ以前にも喚鐘は存在していたのだろうが太平洋戦争時の金属供出で失われているだろうとのことである。



<梵鐘>昭和24年4月に桑名市の鍋吉鋳造所の鋳匠・伊藤軍市郎氏の制作による。こちらも以前の物は太平洋戦争時の金属供出で失われているだろうとのことである。

当寺を後にした参加者は、それぞれ楚原駅、大泉駅へと向かって当企画は終了となった。一部の参加者は当寺に残り、ご住職のご厚意でさらに詳しい解説や資料を見せて頂くことができた。また、紙面の都合上、ここでの紹介を省かざるを得ないが、ご住職は当地域の歴史や有力者である種村氏の研究をライフワークとされ発表されているので、興味がある方は是非当寺ホームページ(<http://www.cty-net.ne.jp/~irinon/index.html>)をご覧ください。

#### 追記（土井忠之）

2021年6月、集山一廣さんが逝去されました。集山さんは北勢線の魅力を探る会結成時からのメンバーで、過去の探る会の企画や実施において中心的に活躍された方であり、今後も探る会の黒柱として活動が期待された方でした。

2020年1月に実施された第32回北勢線の魅力を探る「六把野井水と自噴井」の下見ではメンバー8人のひとりとして元気に全コースを歩かれましたが、2022年（本年）4月の本番コースではその姿を見ることはできませんでした。この2年間の時間の非情さを感じざるをえず、返す返すも残念でなりません。

集山さんのご冥福を心からお祈りします。天国でもいつもの笑顔で汽車旅や町歩きを楽しんで下さいね。



画・集山一廣

～～メモリアル～～



第12回 2009. 4. 19



第13回 2009. 9. 27



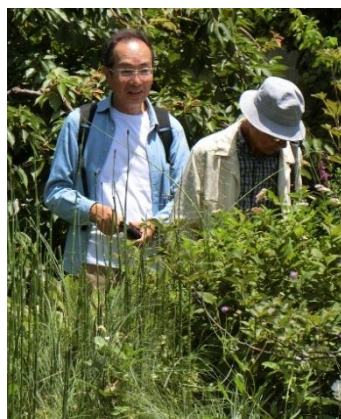
第16回 2011. 4. 16



第31回 2019. 4. 20



阿下喜散策 2018. 6. 18

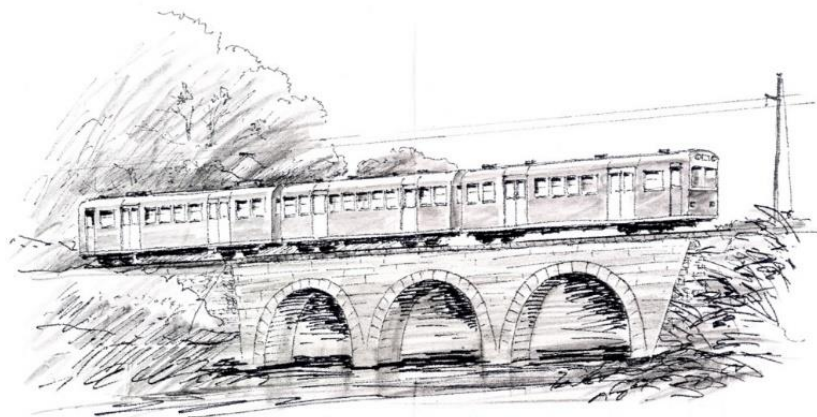


西武池袋本店睡蓮の庭と荒川電車 2018. 7. 1



第32回下見 2020. 1. 5





画・集山一廣

第32回北勢線の魅力を探る  
「六把野井水と自噴井」 報告書

編集・発行：北勢線の魅力を探る会

代表：近藤順子

連絡先：いなべ市員弁町大泉732

TEL 080-3073-3313

E-mail [j-kondo@cty-net.ne.jp](mailto:j-kondo@cty-net.ne.jp)

発行日：2022年6月16日

本報告書の著作権は上記発行者に帰属しています。  
ご利用の際はご一報ください。